

人性

全三七巻十別冊

- ◎体裁 B5判/上製/総約九、三〇〇ページ
- ◎別冊 解説(松原洋子)・総目次・索引(別冊のみ分売可)本体二〇〇〇円十税 ISBN4-8350-3279-9
- ◎推薦 富士川英郎(富士川游著作集編集委員・富士川游 四男) + 鈴木貞美(国際日本文化研究センター教授) + 金森修(東京大学助教授 + 佐藤達哉(立命館大学助教授) + 古川誠(関西大学助教授)
- ◎揃定価 本体三万七千四百〇〇円十税
- ◎配本 全四回配本

- 〈復刻版巻数〉
- 〈原本巻号数/原本発行年月〉
- 第1巻〜第4巻 第一巻第一号〜第二巻第二号 第一回配本 二〇一年六月 ISBN4-8350-3258-6
 - 第5巻〜第8巻 第四巻第一号〜第七巻第六号 第二回配本 二〇一年九月 ISBN4-8350-3263-2
 - 第9巻〜第12巻 第七巻第七号〜第一〇巻第二号 第三回配本 二〇一年十一月 ISBN4-8350-3268-3
 - 第13巻〜第17巻 第一二巻第一号〜第二四巻第二号 第四回配本 二〇二年二月 ISBN4-8350-3273-X



ドイツ・エーナにて。一九〇〇年五月八日。
左から呉秀三・下田次郎・富士川游

変態心理 全三四巻十別冊

「変態」とは「常態」でないこと、「変態心理」とは異常心理、超心理といふほどの意味である。しかも古峽の関心は、幻覚・性・妄想・自殺など個人心理にとどまらず、迷信・流言・宗教など集団心理現象にまで及び、多くの専門家がアカデミズムの枠を越えて、意欲的な論文・報告を発表する場になった。社会心理学・社会精神医学の先駆的雑誌を全冊復刻!

- ◎編集委員 小田晋+栗原彬+佐藤達哉+曾根博義+中村民男
- ◎体裁 A5判/上製/総一万二〇〇〇ページ
- ◎別冊 解説(曾根博義・中村古峽と私)(中村民男)・総目次・索引
- ◎揃定価 本体三〇万三〇〇〇円十税(別冊のみ分売可)本体三〇〇〇円十税

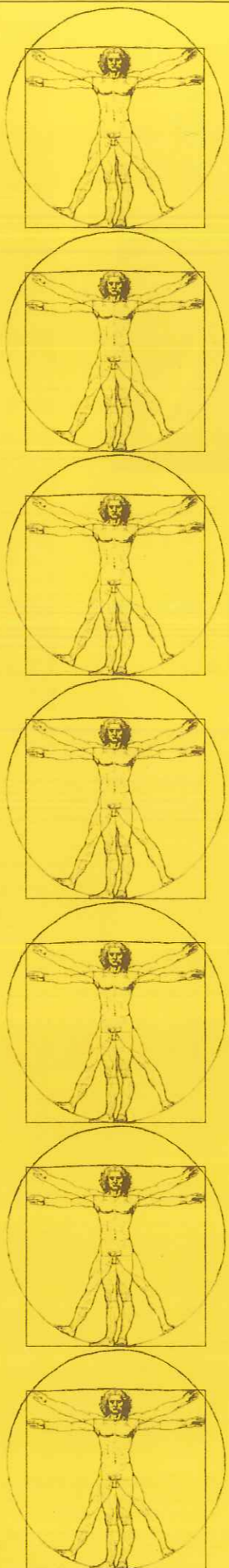
2001・5
不二出版
〒113-0023 東京都文京区向丘1-2-12
電話(03)3812-4433
ファクシミリ(03)3812-4464
振替 00160・294084

●表示価格は、全て税別です。

人性

一九〇五年〜一九一八年

新選



全三七巻十別冊

富士川游 主筆 解説 松原洋子 推薦 富士川英郎・鈴木貞美・金森修・佐藤達哉・古川誠

揃定価 本体三万七千四百〇〇円十税

明治三十八年(一九〇五年)五月二十七日 創刊 第一号
明治三十九年(一九〇六年)五月二十七日 創刊 第二号
明治四十年(一九〇七年)五月二十七日 創刊 第三号
明治四十一年(一九〇八年)五月二十七日 創刊 第四号
明治四十二年(一九〇九年)五月二十七日 創刊 第五号
明治四十三年(一九一〇年)五月二十七日 創刊 第六号
明治四十四年(一九一一年)五月二十七日 創刊 第七号
明治四十五年(一九一二年)五月二十七日 創刊 第八号
明治四十六年(一九一三年)五月二十七日 創刊 第九号
明治四十七年(一九一四年)五月二十七日 創刊 第十号
明治四十八年(一九一五年)五月二十七日 創刊 第十一号
明治四十九年(一九一六年)五月二十七日 創刊 第十二号
明治五十年(一九一七年)五月二十七日 創刊 第十三号
明治五十一年(一九一八年)五月二十七日 創刊 第十四号
明治五十二年(一九一九年)五月二十七日 創刊 第十五号
明治五十二年(一九一九年)五月二十七日 創刊 第十六号
明治五十二年(一九一九年)五月二十七日 創刊 第十七号
明治五十二年(一九一九年)五月二十七日 創刊 第十八号
明治五十二年(一九一九年)五月二十七日 創刊 第十九号
明治五十二年(一九一九年)五月二十七日 創刊 第二十号



自然科学と人間学の融合をめざした、二〇世紀初頭の知のデータベース!

「人性」とはすなわち「人間の本性」のこと。
医学史の創始者として知られる富士川游の
広い関心と鋭いアンテナがとらえた、

一九〇〇〜一九一〇年代日本の知の最先端。
心理学・遺伝学・優生学・人類学・犯罪学・
精神医学・性科学・民俗学・社会衛生学など
あらゆる分野から「人間とは何か」に迫った
明治期エンサイクロペディアともいえるべき雑誌の復刻版。

不二出版

本誌は、医史学者として知られる富士川游主筆の自然科学雑誌である。「自然科学上の知識に拠りて人類の社会的生活及び精神的生活を研究する我邦唯一の学術雑誌」と謳われるとおり、自然科学によって人間に係わる問題を解決しようとする雑誌として創刊された。

現役の医学者、文学者、法学者などが多数寄稿すると同時に、国内外での学問の情報に高くアンテナを張り、海外の論説の紹介、医学雑誌や統計雑誌などからの転載も豊富である。

本誌は、心理学、生物学、文化人類学、社会衛生学、「人種」衛生学、社会病理学、教育学、精神医学、性科学、民俗学、犯罪生物学、法社会学、社会学、統計学、宗教学など多種多様な分野を網羅している。とくに犯罪者・心身障害者・精神病者・女性などを対象にした研究論考には、当時の知識人の人間観がよく現れている。

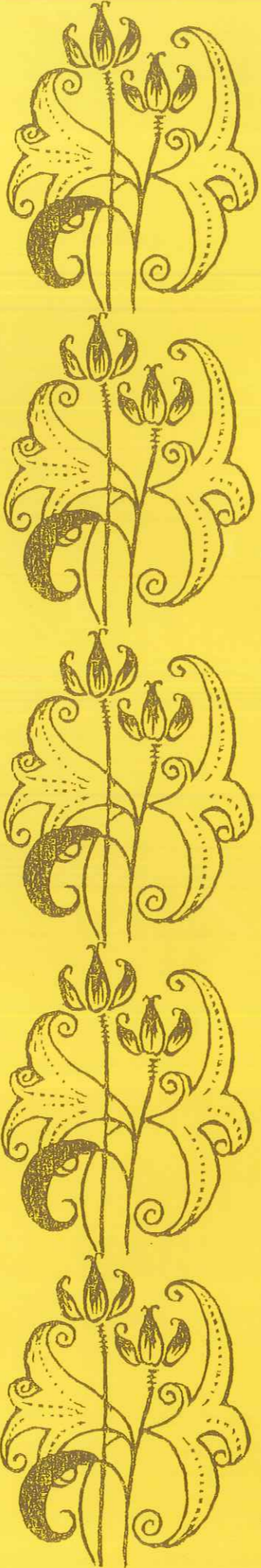
科学史の範囲にとどまらず、児童問題・女性問題・性教育・優生問題・精神衛生学・心理学等の歴史を探求するために必須の文献である。

不二出版

精神病児ノ學校



時設立ア見テ補助學ノ如キモ、精神病児ノ學校タルノ名ニ違背セザルニ注意ヲ有スルモノナリト云フ能ハズ。故ニ精神病児ノ教育ニ關シテハ大體學ヲ存スルアリテ、結局病児ノ損耗ニ歸スル所ナリス。病因ノ爲メニ自覚ハ有テタル刺戟作用ヲ避リ、腦質ノ疲弱ヲ來ス。病狀益々發展シテ遂ニ劇止セラルコトナリ。學校長トシテハ此種ニ適合ナル出精ヲ採ルベシト云フ能ハズ。又臨取扱スル餘暇ナキヲ以テナリ。又臨



「人間」を自然科学の立場から考究

富士川英郎 (富士川游著作集 編集委員・富士川游 四男)

「推せんします」
人性は富士川游が主宰して、明治三十八年四月に創刊された雑誌である。「人性」とは「人間」ということであって、この雑誌は「人間」を主として自然科学の立場から、観察し、考究しようとしたものである。そのおよその傾向は、創刊号以下に連載された、「精神トハ何ゾ」(片山国嘉)、「靈魂不滅歟將消滅歟」(天沢岳太郎)、「信仰ノ説」(富士川游)、「智ト信」(誤惑ト迷信ト妄想) (真秀三) などによっても想像されるだろう。

いずれにしても、このような目的と特色を持った雑誌は、当時の日本にはなかった

ので、これがかなり人々の注目をひいたことは事実であった。そして学界の耆宿加藤

弘之や内田魯庵などの好意ある書評がいろいろの雑誌に発表された。

明治四二年六月には、雑誌「人性」を基礎として、「人性学云」が組織されたが、富士

川游はその幹事となった。しかし、その当時、雑誌「人性」を実際に編集していたのは、

富士川游の後輩だった石橋臥波である。石橋は民俗学者であったが、彼は明治四

〇年から「人性」の編集者となって、大正二年にまで及んだのであった。ついで大正

三年一月からは荏司秋次郎が石橋に代って、その編集者となった。荏司は眼科医で、

明治四〇年頃に上京して、本郷で開業していたのである。荏司はまた、入沢達吉と

ともに、「鵬外拾遺」を編んで、これを克誠堂書店から刊行したこともある。

ところで、雑誌「人性」は大正六年、その第一三巻第一号より、富士川游、永井潜、

藤浪剛一の三人の主幹となったが、その後はあまり永くは続かなかった。

ふじかわ ひでお



富士川游 (ふじかわ・ゆう 一八五五—一九四〇)

- 一八六五年 広島県に出生。父親は医師
- 一八八一年 広島県病院付属医学校に入學
- 一八八七年 卒業後、東京へ。明治生命保険会社の保険医となる
- 中外医事新報社に入社
- 一八八九年 医師免許証下付
- 松田堅道とともに『普通衛生雑誌』創刊
- 一八九一年 本格的な医史学研究開始
- 雑誌『医談』創刊
- 一八九五年 雑誌『医談』創刊
- 一八九六年 吳秀三とともに『医史料』創刊
- 吳秀三らとともに芸備医学会創立。
- 『芸備医事』を創刊
- 一八九八年 渡欧。ドイツ・イェーナ大学医学部に入學
- 一九〇〇年 ドクトル・メヂチーネの学位を受ける
- 帰国。日本橋中洲養生院内科医長となる
- 一九〇二年 政治新報社創刊
- 日本神経学会創立、評議員となる
- 高島平三郎らと日本児童研究会創立
- 一九〇三年 日本内科学会創立、常任幹事となる
- 一九〇四年 『日本医学史』出版
- 一九〇五年 四月、『人性』創刊
- 日本花柳病予防会幹事、国家医学会評議員となる
- 一九〇六年 医科器械研究会創立
- 東洋大学教授となる
- 一九〇九年 人性学会を組織
- 人性学会主催で「ダルウイン記念講演会」を開く
- 一九一〇年 『脚気病の歴史』、『教育病理学』(吳秀三・三宅鉦一共著)出版
- 一九一二年 『日本疾病史』出版
- 帝国学士院より『日本医学史』に対し恩賜賞が授与される
- 一九一三年 日本民俗学会が創立され、評議員となる
- 片山国嘉・吳秀三らと犯罪学協会を創立
- 一九一四年 日本医師協会を創立
- 一九一五年 『日本疾病史』に対して京都大学より医学博士号が授与される
- 古書保存会創立、評議員となる
- 一九一六年 親鸞聖人讃仰会(のちの正信協会)を創立
- 保健衛生調査会委員となる
- 『金剛心』出版
- 一九一八年 『法爾』創刊
- 一九二〇年 内務省から精神病患者保護に関する講習会の講師を囑託される
- 一九二一年 東洋大学に新設の社会事業科の科長となる
- 一九二二年 鎌倉中学校校長となる
- 一九二四年 『異常児童』出版
- 大阪に創設の中山文化研究所の所長となる
- 一九二五年 花井卓蔵・下田次郎らと飽微同好会を設立、雑誌『飽微』を創刊
- 一九二七年 入沢達吉・土肥慶蔵らと日本医史学会を創立
- 一九三三年 『日本医学史綱要』出版
- 一九三八年 日本医史学会理事長となる
- 一九四〇年 一月、没

(富士川游著作集第一〇巻 思文閣出版より)

人間とは何か——心理学の原点を問う

佐藤達哉 (立命館大学助教授)

私たちは専門分化した学問状況に慣れすぎています。だから「人性」のような学術誌があったことを不思議に思ってしまう。なんで、こんなに色々なことが取り上げられているの? と疑問に思ってしまうのである。現在の自分の専門分野から見ると違うことがあまりに多く取り上げられている。

しかし、このような思いは本末転倒である。

「人性」に込められた意味はどういうものだろうか。「人類の社会的及び精神的生活」に関する問題解決を目標にしたいと主幹の富士川游は述べている。その目的に沿うべく、発刊趣旨にはたくさん学問名が並んでいる。

その中に心理学がある。人間とは何か? を真摯に問うために心理学が求められていた時代。心理学専門の雑誌が発刊される前から心理学は他分野と切磋琢磨しあっていた。

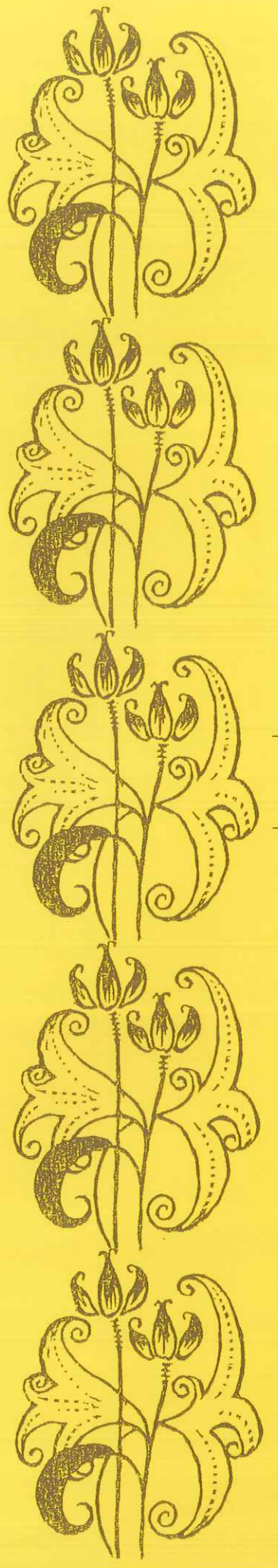
心理学の広がりや他分野の交流が求められている今日、その原点のひとつはおそらくは「人性」に求められる。原点を知ることが、今後の展開にとっても重要である。歴史は、単なる懐古ではなく未来への指針なのだから。

近代「性」概念の成立に立ち会う

古川誠 (関西大学助教授)

「人性」というタイトルは、まさに一九世紀から二〇世紀にかけて日本で進みつつあった、ある認識論的な転換を象徴するものといえよう。

そこで登場してきたのは、個としての「人間」と種としての「人類」とを同一の科学的法則によって捉えようという方法論である。つまりそこでは、人間にかかわる



「推せんします」

「人間」を自然科学の立場から考究 富士川英郎

（富士川游著作集「編集委員・富士川游 四男」

「人性」は富士川游が主宰して、明治三八年四月に創刊された雑誌である。「人性」とは「人間」ということであって、この雑誌は「人間」を主として自然科学の立場から、観察し、考究しようとしたものである。そのおおよその傾向は、創刊号以下に連載された、「精神トハ何ゾ」片山国嘉、「靈魂不滅歟將消滅歟」大沢岳太郎、「信仰ノ説」(富士川游、「智ト信」——誤惑ト迷信ト妄想)貞秀三三などによっても想像されるだろう。

いずれにしても、このような目的と特色を持った雑誌は、当時の日本にはなかった。これがかなり人々の注目をひいたことは事実であった。そして学界の耆宿加藤弘之や内田魯庵などの好意ある書評がいろいろの雑誌に発表された。

明治四二年六月には、雑誌「人性」を基礎として、「人性学云々」が組織されたが、富士川游はその幹事となった。しかし、その当時、雑誌「人性」を編纂していたのは、富士川の郷里の後輩だった石橋臥波である。石橋は民俗学者であったが、彼は明治四〇年から「人性」の編集者となって、大正二年にまで及んだのであった。ついで大正三年一月からは莊司秋次郎が石橋に代って、その編集者となった。莊司は眼科医で、明治四〇年頃に上京して、本郷で開業していたのである。莊司はまた、入沢達吉とともに、「鴈外拾遺」を編んで、これを克誠堂書店から刊行したこともある。

ところで、雑誌「人性」は大正六年、その第二三巻第一号より、富士川游、永井潜、藤浪剛一の三人の主幹となったが、その後はあまり永くは続かなかった。

(ふじかわ・ひでむ)

知の轉換の諸相を伝える 鈴木貞美

（国際日本文化研究センター教授）

「人性」は、当時の言葉で、人間の性質を意味する。主宰者の富士川游は日本医学史の泰斗として知られるが、明治エンサイクロペディアの精神を二〇世紀初頭にも發揮して、医学、生理学や心理学はもとより、児童研究、犯罪研究、性科学、生物学から人類学、宗教学や哲学にわたる海外と日本の最新動向を、この雑誌に編んだ。

そのころ、前の世紀轉換期から一九一〇年代にかけては、ヨーロッパやアメリカで近代の知性に地殻変動ともいべき大きな變動が起こっていた。それは、まさに人間という社会をつくる生物の性格、その生理と心理の不可思議をトータルに突きとめようとする志向が生んだものだ。現象学の端緒が開かれ、一元論が唱えられ、進化論が遺伝学と結びつくなどした。そして、多くの分野で、語の本来の意味でのパラダイムの確立や再確立がなされた。この大變動を受け取りつつ、日本でも独自の知の再編成がなされてゆく。「大正生命主義」も、そこに源がある。

だが、この大變動は、長い間、無視されてきた。今度の世紀轉換期に、各分野を横断する視野が回復するに従い、かつての知の轉換の全体像がやっと明るみに出ようとしている。二〇世紀初頭の人間に関する諸学の動きを、日本的なバイアスを含めて、展望するための最適のツール——学術雑誌「人性」。その復刻は、よく時宜にかなっている。(すずき・さだみ)

「科学の政治性」にとつての二級資料 金森修

（東京大学助教授）

人間が、精神活動の座をも含めた自分の体に「科学的な」眼差しを向け始めたとき、その科学性は、通常人が想像するよりはるかに政治的な文脈のなかで定位されることになった。一九世紀以降の科学的人類学はまさに人種差別思想の温床となったし、その系列下に展開された優生学が、その後どのような履歴を辿ることになったのかは、いまや高名な事実である。また、イタリア学派風の犯罪学も、その種の政治的人類学を社会防犯思想と合体させた地点で成立したものと見ておいて大過ない。

以上のような、普通のわれわれから見れば「負の歴史」とでもいえるものが、科学的言説として機能していたという重大な事実を、綿密な史料に基づいて再認識することは、きわめて重要な学問的作業だといえる。その文脈のなかでいふなら、「人性」の復刻はこの上なく時宜を得た、重大な意味を含んでいる。なぜなら上記のような負の歴史は、単に外国で起きた「他人事」ではなく、我が国固有の文化的文脈との融合のなかで、独自に追認されたからである。「科学の政治性」という、現代科学論にとつても最大の研究対象を追跡するにあたり、「人性」は最大級の重要史料の一つとして、われわれの眼前に晒されることになる。それをどう腑分けするのが、読むものたちの課題となる。(かなもり・おさむ)

- 一九〇六年
・医科器械研究会創立
・東洋大学教授となる
一九〇九年
・人性学会を組織
・人性学会主催で「达尔ウイン記念講演会」を開く
- 一九三三年
・日本医史学綱要出版
一九三八年
・日本医史学会理事長となる
一九四〇年
・十一月、没
（富士川游著作集第一〇巻 思文閣出版より）

人間とは何か——心理学の原点を問う 佐藤達哉

（立命館大学助教授）

私たちは専門分化した学問状況に慣れすぎていて、だから「人性」のような学術誌があったことを不思議に思ってしまう。なんで、こんなに色々なことが取り上げられているの？と疑問に思ってしまうのである。現在の自分の専門分野から見ると違ふことがあまりに多く取り上げられている。

しかし、このような思いは本末転倒である。「人性」に込められた意味はどういうものだろうか。「人類の社会的及び精神的生活」に関する問題解決を目標にしたいと主幹の富士川游は述べている。その目的に沿うべく、発刊趣旨にはたくさん学問名が並んでいる。

その中に心理学がある。人間とは何か？を真摯に問うために心理学が求められていた時代。心理学専門の雑誌が発刊される前から心理学は他分野と切磋琢磨しあっていた。

心理学の広がりや他分野の交流が求められている今日、その原点のひとつはおそらくは「人性」に求められる。原点を知ることが、今後の展開にとつても重要である。歴史は、単なる懐古ではなく未来への指針なのだから。(さとう・たつや)

近代「性」概念の成立に立ち会う 古川誠

（関西大学助教授）

「人性」というタイトルは、まさに一九世紀から二〇世紀にかけて日本で進みつつあった、ある認識論的な轉換を象徴するものといえよう。

そこで登場してきたのは、個としての「人間」と種としての「人類」とを同一の科学的法則によつて捉えようという方法論である。つまりそこそれは、人間にかかわるすべての現象を一律に説明しつくそうという、大いなる知の野望でもあったのだ。

正常と異常とを弁別しようというあくなき欲望。身体という可視的なものに顕れたかすかな症候からその不可視の意味を取りだそうとする執念。個的な人間と全体的な社会とのアナロジーへの固着。こうした、われわれに馴染みぶかい知的な方法がそこ

にあらわれてきたのである。さらにここで見逃してはならないのは、そうした認識論的な轉換と同時に起こったもうひとつの重要な現象がこの雑誌に深くかかわっているということである。それは日本における「性」という概念の成立である。すなわち古代中国に由来する「性」概念から近代西洋的な「性」概念への移行を、まさに「人性」と銘打たれたこの雑誌のなかにたどることができるのである。

そうした意味で「人性」の多様な論説は、新たな世紀を生きつつあるわれわれが読み取るべき、近代の知の姿そのものと断言できるのである。(ふるかわ・まこと)

「主要執筆著者一覧」

浅田一	河本健助	寺田精一
阿部文夫	岸上謙吉	徳谷豊之助
阿部余四男	呉秀三	永井潜
阿部直孝	呉文聡	速水滉
池田隆徳	小酒井光次	原胤昭
石川貞吉	児玉昌	福来友吉
石橋臥波	榎保三郎	藤井健治郎
石巻良夫	佐野保太郎	富士川游
井上哲次郎	沢田順次郎	松本五郎
氏原佐蔵	三田谷啓	三浦謹之助
海野幸徳	志賀潔	三上義夫
大沢謙二	下田次郎	三田定則
大沢岳太郎	莊司秋次郎	三宅敏一
丘浅次郎	菅沼清次郎	元良勇次郎
緒方正清	鈴木梅太郎	森田正馬
小川劍三郎	鈴木泰太郎	谷津直秀
小河滋次郎	高島平三郎	山崎佐
小田平義	高峰博	横山雅男
乙竹岩造	竹内薫兵	淀野耀淳
笠原道夫	竹中成憲	*アルスベルグ
片山国嘉	常光得然	Alsb. George Moritz
加藤弘之	坪井正五郎	クラメル
門脇貞枝	妻木直良	Chr. George Washington
川島金五郎	寺田四郎	ダーウイン
		Darwin, Major Leonard
		オイレンブルグ
		Eulenb. Albert

人性 第一巻 第一號 明治三十八年四月十日發行

人性

ドクトル 富士川 游

人性ノ研究ノ

西洋ニアリテモ、東洋ニアリテモ、『人性』ノ研究ハ、古ヨリ趣味多キモノトシテ、學者ノ間ニ傳ヘラレタリ。シカレドモ、古ノ學者ガ人性ニツキテ攻究セシ所ハ、單ニソノ精神的ノ方面ニシテ、其身軀ノ構造及ビ人類ノ根原等ニツキテハ、近時ニ至ルマデ學者ノ研究問題トナラザリシガ故ニ、人類ノ社會生活及ビ精神生活ヲ論スルニ方リテ、其標準トスル所ハ主ニ宗教的臆斷及ビ哲學的臆斷ナリキ

然ルニ、近年ニ至リ、動物學、解剖學、及ビ生理學ガ、人軀ニツキテ確實ナル知識ヲ吾人ニ賦與シテヨリ、人性ヲ研究スル學問、新ニ興リ、吾人ハコレ等自然科學ニ依リテ得タル吾人現在ノ知識ヲ標準トシ、人類ノ器質的發育、社會的發展、及ビ精神的發展ヲ科學的ニ研究スルコトヲ得ルニ至レリ。我が雜誌『人性』ハ、スナハチ此方面ニ於ケル各科學者ノ業績ヲ蒐集シ、以テ斯ノ學問界ノ趨勢ヲ、概括的ニ報道スルヲ以テ自ラ任ズルナリ

(I)

(II)

人性 (富士川)

人性

〔復刻版刊行概要〕

全三七卷十別冊

◎体裁——B5判／上製／総約九、三〇〇ページ

◎別冊——解説(松原洋子)・総目次・索引(別冊のみ分売可) 本体二〇〇〇円十税 ISBN4-8350-3279-9)

◎推薦——富士川英郎(富士川游著作集編集委員・富士川游 四男)十鈴木貞美(国際日本文化研究センター教授)十金森修(東京大学助教授)十佐藤達哉(立命館大学助教授)十古川誠(関西大学助教授)

◎揃定価——本体三万七千四百〇〇円十税

◎配本——全四回配本

△復刻版巻数

△配本／定価

第1巻～第4巻	第一巻第一号～第三巻第二号	第一回配本 〇一年六月	定価 〇〇〇円十税
第5巻～第8巻	第四巻第一号～第七巻第六号	第二回配本 〇一年九月	定価 〇〇〇円十税
第9巻～第12巻	第七巻第七号～第一〇巻第一号	第三回配本 〇一年一月	定価 〇〇〇円十税
第13巻～第17巻	第一二巻第一号～第一四巻第二号	第四回配本 〇二年二月	定価 〇〇〇円十税

ドイツ・イェーナにて、一九〇〇年五月八日。
左から呉秀三・下田次郎・富士川游



関連図書のご案内(復刻版)

変態心理 全三四巻十別冊

「変態」とは「常態」でないこと、「変態心理」とは異常心理、超心理といふほどの意味である。しかも古映の関心は、幻覚・性・妄想・自殺など個人心理にとどまらず、迷信・流言・宗教など集団心理現象にまで及び、多くの専門家がアカデミズムの枠を越えて、意欲的な論文・報告を発表する場になった。社会心理学・社会精神医学の先駆的雑誌を全冊復刻!

◎編集委員——小田晋+栗原彬+佐藤達哉+曾根博義+中村民男

◎体裁——A5判／上製／総一万二〇〇〇ページ

◎別冊——解説(曾根博義)・「中村古峽と私」(中村民男)・総目次・索引

◎揃定価——本体三〇万三〇〇〇円十税(別冊のみ分売可) 本体三〇〇〇円十税

2001.5

不二出版

〒113 0023 東京都文京区向丘1-2-12
電話(03)3812-4433
フアクシミリ(03)3812-4464
振替 00160294084

●表示価格は、全て税別です。